

谷崎潤一郎 Ⅱ

現代日本文学館

17

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 17

谷崎潤一郎 2

昭和四十二年五月一日第一刷

著者 谷崎潤一郎

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)二二一一
振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

細雪 5

注解 521

解説 井上靖 542

挿画 秋野不矩

朝倉 撰

広田多津

堀 文子

伝記は「谷崎潤一郎(一)」に、年譜は「谷崎潤一郎(二)」に収録

谷
崎
潤
一
郎
(二)

細雪

上巻

一

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへはいつて来た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して、そちらは見ずに、眼の前に映っている長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。

「悦ちゃんのピアノ見たげてるらしい」

——なるほど、階下で練習曲の音がしているのは、雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子に纏まって、

稽古を見てやっているであらう。悦子は母が外出する時でも雪子さえ家にいてくれれば大人しく留守番をする児であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃って出かけるというので少し機嫌が悪いのであるが、二時に始まる演奏会が済みさえしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには帰って来て上げることとどうやら納得はしているのであった。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、また一つあるねんで」

「そう、——」

姉の襟頸から両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉を引いていた。決して猫背ではないのであるが、肉つきがよいので堆く盛り上がった幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしている色つやは、三十を過ぎた人のようにもなく張りきって見える。

「井谷さんが持って来やはった話やねんけどな、——」

「そう、——」

「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。」

「——」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七十圓、ボーナス入れて二百五十圓ぐらいになるねん」

「MB化学工業いうたら、佛蘭西系の会社やねんなあ」

「そうやわ。——よう知ってるなあ、こいさん」

「知ってるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもそういうことには明るかった。そして案外世間を知らない姉たちを、そういう点ではいくらか甘く見ていて、まるで自分が年嵩としかさのような口のきき方をするのである。

「そんな会社の名、私は聞いたことあれへなんだ。——」

本店は巴里にあって、大資本の会社やねんてなあ」

「日本にかて、神戸の海岸通りに大きなビルディングあるやないか」

「そうやて。そこに勤めてはるねんて」

「その人、佛蘭西語できはるのん」

「ふん、大阪外語の仏語科出て、巴里にもちよつとぐらい行てはったことあるねん。会社のほかに夜学校の佛蘭西語の教師してはって、その月給が百圓ぐらいあつて、両方で三百五十圓はあるのやて」

「財産は」

「財産いうては別にないねん。田舎いなかに母親が一人あつて、その人が住んでるはる昔の家屋敷と、自分が住んでる六甲ろくがの家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦で買った小さな文化住宅やそうな。まあ知れたもんやわ」

「そんでも家賃助かるよつてに、四百圓以上の暮しできるわな」

「どうやらか、雪子ちゃんに。係けい累るいはお母さん一人だけ。それかて田舎に住んではって、神戸へは出て来やはれへんねん。当人は四十一歳で初婚や云やはるし、——」

「何で四十一まで結婚しやはれへんだやろ」

「器量好みでおくれた、云うてはるねん」

「それ、あやしいなあ、よう調べてみんことには」

「先方はえらい乗り気やねん」

「雪あんちゃんの写真、行つてたのん」

幸子の上にもう一人本家の姉の鶴子つるこがいるので、妙子は幼いころからの癖で、幸子のことを「中姉ちゃん」、雪子のことを「雪姉ちゃん」と呼びならわしたが、その「ゆきあんちゃん」が詰まつて「きあんちゃん」と聞こえた。

「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持つて行かはつてん。何やたいそう氣に入つてはるらしいねんで」

「先方の写真ないのんか」

階下のピアノがまだ聞こえているけはいなので、雪子が上がつて来そうもないと見た幸子は、

「その、一番上の右の小抽出ひきだしあけてごらん、——」

と、紅棒べんぼうを取つて、鏡の中の顔へ接吻せつぶんしそうなおちよぽ口をした。

「あるやろ、そこに」

「あつた、——これ、雪あんちゃんに見せたのん」

「見せた」

「どない云うた」

「例によつてどないも云わへん、『あゝこの人』云うただけや。こいさんどう思う」

「これやったらまあ平凡や。——いや、いくらかええ男の方かしらん。——」

けどどう見てもサラリーマンタイプ

やなあ」

「そうかて、それに違いなんねんもん」

「一つ雪あんちゃんにええことがあるで。——佛蘭西語教せてもらえるで」

顔があらかた出来上がったところで、幸子は「小槌屋呉服店」と記してある畳紙の紐を解きかけていたが、ふと思いついて、

「そやった、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行つて、注射器消毒するように云うといてんか」

脚氣は阪神地方の風土病であるともいうから、そんなせいかも知れないけれども、ここの家では主人夫婦を始め、ことし小学校の一年生である悦子までが、毎年夏から秋へかけて脚氣に罹り／＼するので、ウィタミンBの注射をするのが癖になってしまつて、近頃では医者へ行くまでもなく、強力ベタキシンの注射薬を備えておいて、家族が互いに、何でもないようなことにもすぐ注射し合つた。そして、少し体の調子が悪いと、ウィタミンB缺乏のせいにしたが、誰が云い出したのかそのことを『B足らん』と名づけていた。

ピアノの音が止んだと見て、妙子は写真を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行つたが、降りずにそこから階下を覗いて、

「ちよつと、誰か」

と、声高に呼んだ。

「——御寮人さん注射しやはるで。——注射器消毒し

といてや」

二

井谷というのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の世話をするのが好きと聞いていたので、幸子がかねてから雪子のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ、先日セッットに行った時に、「ちよつと奥さん、お茶に付き合つて下さいませんか」と手の空いた際に幸子を誘い出して、ホテルのロビーで始めてこの話をしたのである。実はこちらへ御相談をしないで悪かつたけれども、ぐず／＼していい良い縁を逃がしてはと思つたので、お預かりしてあつたお嬢様のお写真を何ともつかず先方へ見せたのが、一箇月半ほども前のことになる。それきり暫く音沙汰がなかったので、自分は忘れかけていたのであつたが、先方ではその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪の御本家のこと、御分家のお宅さんのこと、それから御本人のことについては、女学校へも、習字やお茶の先生の所へも、行つて尋ねたらしい。それで御家庭の事情は何もかも知つていて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだということとはわざ／＼新聞社まで行つて調べて来ているくらいなので、よく諒解していただけれども、なお自分からも、そんなことがあるようなお嬢様かどうかまあお会いになつてごらんなさいと云つて、納得が行くように説明はしておいた。先方は謙遜して、蒔岡さんと私とでは身分違いでもあり、薄給

の身の上で、そういう結構なお嬢様に来ていただけるものとも思えないし、来ていただいても貧乏所帯で苦勞をさせるのがお気の毒のようだけれども、万一縁があつて結婚できるならこんな有難いことはないから、話すだけは話してみてほしいと云つてゐる。自分の見たところでは、先方も祖父の代までは或る北陸の小藩の家老職をしていたとかで、現に家屋敷の一部が郷里に残つてゐるというのであるから、家柄の点ではそう不釣合でもないのではあるまいか。お宅さんは舊家でおありになるし、大阪で「蒔岡」と云えば一時は聞こえていらしたに違ひないけれども、——こう申しては失礼であるが、いつまでもそういう昔のことを考へておいでになつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかであらうか。現在では月給も少ないけれども、まだ四十一日から昇給の望みもないことはないし、それに日本の会社と違つてわりに時間の餘裕があるので、夜学の受持時間の方をもっと殖やして四百圓以上の月収にすることは容易だと云つてゐるから、新婚の所帯を持つて女中を置いて暮らして行くにはまず差支えあるまい。人物については、自分の二番目の弟が中学時代の同窓で、若い時からよく知つてゐるので、太鼓判を捺すと云つてゐる。そう云つてもお宅さんの手で一往お調べになるに越したことはないけれども、結婚がおくれた原因は全く器量好みのためではかに理由は無いというのが、やはりほんとうらしく思える。それは巴里にも行つてゐたのだし、四十を越してもゐることだから、

まるきり女を知らない筈はないだらうけれども、自分がこの間會つてみた感じでは、それこそ生真面目なサラリーマンで、遊びの味などを知つてゐるような様子は微塵もなかった。器量好みなどということは、得てそういう堅人によくあるものだが、その人も巴里を見て来た反動でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合わなくてもよいしとやかで、おとなしくて、姿がよくて、和服の着こなしが上手で、顔立ちももちろんだけれども、第一に手足のきれいな人がほしいという注文なので、お宅のお嬢様なら打つてつけど思ふのであるが、——というような話なのであった。

長らく中風症で臥たきりの夫を扶養しつつ美容院を経営して、かたわら一人の弟を医学博士にまでさせ、今年の春には娘を目白に入學させたというだけあつて、井谷は普通の婦人よりは何層倍か頭腦の廻転が速く、万事に要領がよく代りに、商売柄どうかと思われるくらい女らしさに缺けていて、言葉を飾るような廻りくどいことをせず、何でも心にあることを剥き出しに云つてのけるのであるが、その云い方がアクドクなく、必要に迫られて真実を語るに過ぎないので、わりに相手に悪感を与えることがないのであつた。幸子も最初、井谷がいつもの急き込むような早口でしゃべるのを聞いてゐると、随分この人とは思ふところもあつたけれども、だん／＼聞いて行くうちに、男勝りの親分肌な氣象から好意で云つてくれていることがよく分かるし、それに何よりも、理路整然と、打ち込む隙もなく話しかけ

て来られるので、ぐっと俯伏せに取って抑えられてしまった感じがした。そして、では早速本家の方とも相談をし、またこちらでもその人の身元を調べるだけは調べさせていだいてと、その時はそう云って別れたのであった。

幸子のすぐ下の妹の雪子が、いつの間にか婚期を逸してもう三十歳にもなっていることについては、深い訳がありそうに疑う人もあるのだけれども、実際はこれというほどの理由はない。ただ一番大きな原因を云えば、本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、また本人の雪子にしても、晩年の父の豪奢な生活、蒔岡という舊い家名、——要するに御大家であった昔の格式に囚われていて、その家名にふさわしい婚家先を望む結果、初めのうちは降るほどあった縁談を、どれも物足りないような気がして断わり／＼したもののだから、次第に世間が愛憎をつかして話を持って行く者もなくなり、その間に家運が一層衰えて行くという状態になった。だから「昔のことを考えるな」という井谷の言葉は、ほんとうに為めを思った親切な忠告なので、蒔岡の家が全盛であったのはせい／＼大正の末期までのことで、今ではそのころのことを知っている一部の大阪人の記憶に残っているに過ぎない。いや、もっと正直のことを云えば、全盛と見えた大正の末ごろには、生活の上にも営業の上にも放縦であった父の遣り方が漸く祟って来て、すでに破綻が続出しかけていたのであった。それから間もなく父が死に、営業の整理縮小が行なわれ、次いで舊幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に渡るようになった

が、幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の体面をとどめていた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐かしげに覗いてみたりしたものであった。

女の子ばかりで男の子を持たなかった父は、晩年に隠居して家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎えて分家させたが、三女雪子の不仕合せは、もうその時分そろ／＼結婚期になりかけていたのに、とう／＼父の手で良縁を捜してもらえなかったこと、義兄辰雄との間に感情の行き違いが生じたこと、などにもあった。いったい辰雄は銀行家の倅で、自分も養子に来るまでは大阪の或る銀行に勤めていたのであり、養父の家業を受け継いでからも実際の仕事は養父や番頭がしていたようなものであった。そして養父の死後、義妹たちや親戚などの反対を押し切って、まだ何とか踏ん張れば維持できたかも知れなかった店の暖簾を、蒔岡家からは家来筋に当たる同業の男に譲り、自分はまたもとの銀行員になった。それというのは、派手好きな養父と違い、堅実一方で臆病でさえある自分の性質が、経営難と聞い／＼つ不馴れた家業を再興するのに不向きなことを考え、より安全な道を選んだ結果で、当人にすれば養子たる身の責任を重んじたからこそその処置なのであるが、雪子は昔を恋うるあまり、そういう義兄の行動を心の中で物足りなく思い、亡くなった父もきっと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難しているであろうと思っていた。と、ちやうどその時分、——父が死んで間もないころ、義兄が

たいそう熱心に彼女に結婚をすすめた口があった。それは豊橋市の素封家の嗣子で、その地方の銀行の重役をしている男で、義兄の勤める銀行がその銀行の親銀行になっている関係から、義兄はその男の人物や資産状態などをよく知っていると云うわけであった。そして豊橋の三枝家ならば格式から云っても申し分はないし、現在の時岡家にとつては分に過ぎた相手であるし、本人もいたって好人物であるからと、見合いをするまでに話を進行させたのであったが、雪子はその人に会ってみて、どうにも行く気になれなかったのであつた。というのは、別に男ぶりがどうこうというのではないが、いかにも田舎紳士という感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つきをしていた。聞けば中学を出た時に病氣をしたとかで上の学校へははいらなかったというのであるが、おそらく学問の方の頭は良くないのであらうと思うと、女学校から英文専修科までを優秀な成績で卒業した雪子としては、さきさきその人を尊敬することができそうもない懸念があつた。それに、いくら資産家の跡取りで生活の保証はあるにしても、豊橋というような地方の小都會で暮らすことは淋しさに堪えられない気がしたが、それには誰よりも幸子が同情して、そんな可哀そうなことがさせられるものかと思つたりした。義兄にしてみれば、義妹は学問はよくできたかも知れないけれども、少し因循過ぎるくらい引つ込み思案の、日本趣味の勝った女であるから、刺戟の少ない田舎の町で安穩に暮らして行くのには適しているし、さだめし

本人にも異存はあるまいと極めてかかったのが、案に相違したのであったが、内気で、倉庫屋で、人前では満足に口が利けない雪子にも、見かけによらない所があつて、必ずしも忍従一方の婦人ではないことを、義兄が知つたのはその時が最初であつた。

が、雪子にしても、お腹の中ではつきり「否」にきまつていることなら、早くそう云えばよいものを、どうとも取れるような生返事ばかりして、いよく／＼となつてから、それも義兄や上の姉には云わないで、幸子に打ち明けたのは、一つにはあまりにも熱心な義兄の手前、云い出しにくかったせいもあるが、そういう風に言葉数の足りないのが、彼女の悪い癖なのであつた。そのために義兄は内心否でないものと感違ひをし、先方も見合いをしてからは、急に乗り気になつてせひにと懇望して来るといふわけで、話は退り引きならない所まで進んだのであつたが、いったん「否」の意志表示をしてからの雪子は、そうなると義兄や上の姉が代わる／＼口を酸くして頼むようにして勧めても、最後まで「うん」ということを云わないでしまった。今度は泉下の養父にも喜んでもらえろと思つてかかった縁談であるだけに、義兄の失望は大きかつたが、それより困つたのは、先方に對し、仲に立つて斡旋してくれた銀行の上役の人に対し、いまさら挨拶のしようがなくて冷汗の出る思いをしたこと、——それも、もつとも聞こえる理由があるならばだけれども、顔が知的でないなどと下らぬ難癖をつけて、こんな、二度とありそうにもない勿体ない縁

を嫌うというのは、ただ雪子の我が儘で、邪推をすれば、故意に兄を苦しい立ち場に陥れてやろうという底意があるのではないかとさえ、取れないでもなかった。

それからこつち、義兄は雪子の縁談には懲り／＼した形で、他人が持つて来てくれる話には喜んで耳を傾けるけれども、自分が積極的に取り持つことや、先に立って良い悪いの意見を述べることは、できれば避けたいという風に見えた。

三

雪子を縁遠くしたもう一つの原因に、井谷の話の中に出た「新聞の事件」というものがあつた。

それは今から五六年前、当時二十歳であつた末の妹の妙子が、同じ船場の舊家である貴金屬商の奥畑家の倅と恋に落ちて、家出をした事件があつた。雪子をさしおいて妙子が先に結婚することは、尋常の方法ではむずかしいと見て、若い二人がしめし合はして非常手段に出たもので、動機は真面目であるらしかったが、どちらの家でもそんなことは許すべくもなかったのだ、じきに見つけ出して雙方に連れ戻して、そのことはたわいもなく解消したかのごとくであつたが、運悪くそれが大阪の或る小新聞に出てしまつた。

しかも妙子を間違えて、雪子と出、年齢も雪子の年になつてゐた。当時蒔岡家では、雪子のために取消しを申し込んだものか、ただしそうすれば半面において妙子がしたことを裏書きするのと同じ結果を招く恐れがあり、それも知恵

のない話であるからいつそ黙殺してしまつたものと、当主辰雄がさん／＼考えたのであつたが、過ちを犯した者はどうあろうとも、罪のない者にとばかりを受けさせておくわけには行かぬと思つたので、取消しを申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消しではなく、正誤の記事で、予想した通り改めて妙子の名が出た。辰雄はその前に雪子の意見も聞いてみるべきであるとは心付いてゐただけだ、でも、聞いたところで取り分け自分に対して口の重い雪子が、どうせ明瞭な答をしてくれそうもないことは分かつてゐたし、義妹たちに相談すれば利害の相反する雪子と妙子との間が紛糾することもあろうしと考え、妻の鶴子に話しただけで、自分一人の責任でそういう手段に出たのであつたが、正直のところを云えば、妙子を犠牲にしても雪子の冤を雪ぐことによつて雪子によく思われたという底意が、いくら働いていたかも知れない。それというのが、養子の辰雄には、大人しいようでもその実いつまでも打ち解けてくれない雪子というものが一番氣心の分らない抜いてくれない小姑なので、こんな機会に彼女の機嫌を取りたかつたこともある。しかしその時も当てが外れて、雪子も妙子も彼に悪い感じを持った。雪子に云わせれば、新聞に間違つた記事が出たのは私の不運としてあきらめるより仕方がない、取消しなどというものはいつも人目に付かない隅の方に小さく載るだけで、何の効果もありはしない、私たちとしては、取消しにせよ何にせよ一回でも多く新聞に出ることが不愉快なのだから、そつと黙殺してしまふのが賢

かったのだ、兄さんが私の名誉回復をしてくれるのは有難いけれども、そうしたらこいさんはどうなるであろう、こいさんのしたことは悪いには違いないが、年齒も行かない同士の無分別から起こったこととすれば、責められてよいのは監督不行届きな両方の家庭で、少なくともこいさんについては、兄さんはもちろん私にだって一部の責任がないとは云えない、そう云っては何だけれども、私は自分の潔白は、知る人は知っていてくれると信じているので、あのくらしい記事でそんなにひどく傷つけられる自分であるとは思っていない、それより今度のことが原因で、こいさんが僻み出して不良にでもなったらどうするか、兄さんのすることは万無理窟詰め、情味がない、第一これほどのことを、最も利害関係の深い私に一言の相談もせずに行うとは專横過ぎる、———というのであったが、妙子は妙子で、兄さんが雪姉ちゃんのために証を立てて上げるのは当たり前だけれども、私の名を出さないでも済ませる方法もあったろうではないか、相手は小新聞なのだから、何とか手を廻せば伏せてしまうことができたろうものを、兄さんはそういう場合にお金を吝しむからいけない、———と、これはその時分から云うことがませていた。

辰雄はこの新聞の事件の時、世間に合わす顔がないと云って辞職願を出したほどであった。もともとその方は「それには及ばぬ」ということで無事に済んだが、雪子が受けた災難の方は何としても償いようがなかった。たま／＼幾人かの人は、正誤の記事に気が付いて彼女の冤罪を知った

でもあろうが、彼女は潔白であつたにしても、そういう妹娘のある事実が知れ渡ったことは、姉娘を、その自負心にかかわらず、いよ／＼縁遠くする原因になった。ただ、雪子自身は内心はとにかく、表面は「それくらいなこと傷つきはしない」という建前でいたので、そんな事件のために妙子と感情が齟齬する結果にはならず、かえって義兄に対して妙子を庇うという風であつた。そして、この二人は、上本町九丁目の本家から、阪急蘆屋川の分家、———幸子の家の方へ、前からも始終、一人が帰れば一人が来るという風にして、代わる／＼泊りに来ていたのが、この事件をきっかけにしてだん／＼頻繁になり、二人が一緒にやって来て半月も泊まり続けることがあるようになった。それというのが、幸子の夫の貞之助は、計理士をしていて毎日大阪の事務所へ通い、ほかに養父から分けてもらった多少の資産で補いをつけつつ暮らしているのであったが、嚴格の一方の本家の兄と違って、商大出に似合わず文学趣味があり、和歌などを作るという風であつたし、本家の兄のような監督権を持たなかつたし、いろ／＼の点で雪子たちには、そう恐くない人なのであつた。ただあまり雪子たちの滞在が長くなると、本家へ気がねして「一遍帰つてもろたら」と幸子に注意することはあつたが、幸子は毎度、そのことなら姉ちゃんが諒解してしてくれるから、心配しやはらんでもよい、今では本家も子供が殖えて家が手狭になったことだし、時々妹たちが留守にした方が姉ちゃんも息抜きができるであらう、まあ当分は当人たちの好きなようにさせ

ておいても別条はないと云い／＼して、いつかそういう状態が普通になっていたのであった。

そんな工合にして数年たつうちに、雪子の身の上には格別の変化も起こらなかったが、妙子の境遇に思いがけない發展があったので、結局においてそれが雪子の運命にも或る関わりを持つに至った。——というのは、妙子は女学校時代から人形を作るのが上手で、暇があるときよく小裂を切り刻んでいたが、それ以上のものであったが、だん／＼技術が進歩して、百貨店の陳列棚へ作品が出るようになった。彼女の作るのは佛蘭西人形風のもの、純日本式の歌舞伎趣味のもの、その他さまざまで、どれにも他人の追隨を許さない独創の才が閃めいていたが、それは一面、映画、演劇、美術、文学等に互る彼女の日頃の嗜みを語るものでもあった。とにかく彼女の手から生まれる可憐な小藝術品は次第に愛好者呼び集め、去年は幸子の肝煎で心齋橋筋の或る画廊を借りて個展を開いたほどであった。彼女は最初、本家は子供が大勢で騒々しいので、幸子の家へ来て作っていたが、そうなるともっと完全な仕事部屋がほしくなつて、幸子の所から三十分もかからずに行ける、同じ電車の沿線の夙川の松濤アパートの一室を借りた。本家の兄は妙子が職業婦人めいて来ることには不賛成であつたし、ことに部屋借りをするのはどうかと思つただけけれども、この時も幸子が口をきいてやつて、——過去にちよつとした汚点を持つ妙子は、雪子以上に縁遠いわけであるから、何か一つ仕事を当てておく方がよいかも知れない、部屋借り

といつても仕事をしに行くだけで寝泊りをするのではない、幸い友達達の未亡人が経営しているアパートがあるから、よく頼み込んでそこを借りることにしたらどうであろう、そこなら近い所だから自分も時々様子を見に行くことができる、というようなことを云つて、やや事後承諾的に運んでしまつたのであった。

元來が陽気な性質の妙子は、雪子とは反対に警句や冗談などを飛ばすといつた風であつたのが、事件を引き起こした当座は陰鬱になつてしまひ、変に考えこんでばかりいたが、そういう新しい世界の開けたのが救ひになつて、近頃は以前の朗らかさを取り返しつつあつたので、その点では幸子の見通しが中つたわけであつた。が、本家からは月々の小遣いを貰つてい、そのほかにまた作品が相当な値で売れるところから、自然金廻りがよくなつて、時々びっくりするようなハンドバッグを提げていたり、舶来品らしい素敵な靴を穿いていたりした。これには上の姉や幸子が心配して貯金をすすめたことがあつたが、云われるまでもなく蓄める方も如才なく蓄めていて、ちゃんと郵便貯金の通帳を上姉には内証だと云つて幸子にだけ出して見せ、「中姉ちゃんお小遣いがないなら貸したげるわ」と云つたのには、さすがの幸子も聞いた口が塞がらなかつた。と、或る時幸子は、「お宅のこいさんが奥畑の啓坊と夙川の土手を歩いてはつたのを見た」と云つて、注意してくれた人があつたのではつとした。実はこの間、妙子のポケットからハンカチと一緒にライターが転げ出したのを見て、妙子が隠れ

幸子
堀文子画



鶴子
秋野不矩画